

日本ナイル・エチオピア学会第16回高島賞

審査結果報告

受賞対象論文

Morie Kaneko.

“Variations in pottery making in southwestern Ethiopia.”

in Harald Aspen, Birhanu Teferra, Shiferaw Bekele, and
Svein Ege (eds.) *Aethiopistische Forschungen*
Vol. 72:187-199. 2010.

◆ 金子守恵氏の論文に対する審査報告 ◆

金子守恵氏は、1974年生まれ、現在は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の特任助教として勤務している。今回、太田至会員より、日本ナイル・エチオピア学会高島賞授賞候補者として推薦を受けた。審査対象論文は上記の1編で、それ以外に関連論文として8編がある。

これらについて審査委員である、曾我亨会員(弘前大学)、湖中真哉会員(静岡県立大学)と松田凡(審査委員長・京都文教大学)の3名が審査を行い、その結果、第16回高島賞として授賞に値すると判断し、ここに報告する。

授賞対象論文は、エチオピア西南部オモ系農耕民アリの土器づくりにおける身体技法に着目し、丹念なフィールドワークを通じて、そのヴァリエーションの詳細を記述し、分析したものである。この論文が評価できる最大の点は、“FMPs”(Finger-movement Patterns, 指使い)と“UP”(Unit of Process, 工程単位)というふたつの分析枠組を設定して、土器づくり

の身体技法に関わる民族誌的記述法を新規に開拓したことである。これによって、作り手個人の技法の差異について、集団や地域における技法の均質性、安定性を強調してきた従来の研究に対し、環境や買い手との関わりを踏まえ、技法の習得、変化、創造のプロセスを含んだ動的な分析対象として記述されることになった。フィールドワークの過程で見出した調査成果を有効に記述し得る最適な方法論を開拓することは、人類学者に求められる資質であるが、それには多大な困難を伴う。しかし、金子氏は、フィールドにおける丹念かつ微細な観察を通じて、この試練を乗り越えて、独創的な民族誌的記述法を編み出したのである。

しかしながら、受賞論文に対して疑問がないわけではない。少なくとも、近年のアフリカを対象としてきた人類学は、国民国家への包摂と周縁化、市場経済化による貧困化、劣悪なガバナンスとインセキュリティ等の厳しい現実に対峙してきた。金子氏の推薦対象論文が身体技法の民族誌的記述として極めて高い水準にあることは疑い得ないが、アリの社会は、こうした厳しい現実とは無縁なのだろうか。金子氏がひたすら土器づくりだけに焦点化してきた一方で、さまざまな問題系を捨象してきたのではないかという疑念もぬぐい去れない。金子氏の研究とこうした問題意識を組み合わせることは、さらなる挑戦であると思われる。

ところで、氏は近年、日本ナイル・エチオピア学会学術大会において、エンセーテの繊維をもちいた一村一品運動の試みを発表している。在来の技術を切り口にして、開発にも実践的に取り組もうとする彼女の態度も、開発に深い関心を寄せる高島賞の理念に合致している。氏が対象としてきたアリの土器職人や鍛冶職人は、当該社会で差別をうけているが、研究においてはあえて技術の問題に専念し続けてきた。けれども、技術の問題に取り組み続けてきたことや、開発への取り組みを通して、差別や貧困の問題、国民国家との関わりについても、新たな記述の地平が開けるのではないかと期待する。今後の活躍を楽しみにしたい。

2010年4月17日

選考委員会

松田 凡 (選考委員長)

曾我 亨

湖中真哉

受賞によせて

金子守恵

平成22年度第16回高島賞の受賞にあたり、審査をしてくださった方々はじめ、これまでご指導くださった先生、学会での発表に対してさまざまなコメントをしてくださった日本ナイル・エチオピア学会の会員のみなさま、そして私をうけいれてくださったフィールドの方々には深く感謝します。

受賞の対象として審査していただいた論文(下記)では、エチオピア西南部に暮らすアリ女性職人の土器づくりにおける身体動作に注目し、彼女たちによって分節化されている微細な身体技法の単位を抽出したうえで、それをもとに個々の職人のつくり方を比較可能なかたちで記述、分析した。これにより、彼女たちの身体技法にそった多様な成形技術の実態をあきらかにした。

Morie Kaneko. "Variations in pottery making in southwestern Ethiopia." Harald Aspen, Birhanu Teferra, Shiferaw Bekele, and Svein Ege (eds.) *Aethiopiatische Forschungen* Vol. 72:187-199. 2010.

土器とそれをつくる身体への着目

この論文は、筆者が女性職人に入門して土器づくりをまなびながらフィールドワークをおこなう過程で直面した出来事を契機として、深く関心を抱いたテーマに関してフィールドワークをおこなった結果を分析したものである。調査対象としたアリの人びとは、おもに4つの形態の土器をつかっている。彼らはたとえ同じ形態の土器であっても、それぞれの部位の大きさのちがいに留意して土器をつかいており、ひとつの土器を複数の用途に用いることはなかった。一見しただけでは、土器の制作者を判別することは困難であった。しかし市場で土器を購入する利用者は、職人の技術的なちがいを目安にして土器をもとめていた。職人は、結果としては同じ形態の土器をつくる。だが、その手順は職人によって異なっていた。職人がそれを強く意識するのは、たとえば、自分の成形した土器を、母や姑、姉妹などに焼成してもらったり、もしくは別の職人の手順の真似をして土器を成形して、壊れてしまったときであった。彼女たちの語りを分析すると、そのような経験を介して、彼女たちは自らの手にあわせた手順で土器を成形・焼成するからこそ、土器が壊れることなく完成することを強く意識していく。それと同時に職人たちは、それぞれの職人によって、手順にちがいがあることを理解しそれを互いに尊重してもいた。



エンセーテの根茎部を土器に詰めこむところ

これまでの研究において、土器の成形技術について記述・分析したものは数多くあったが、それは土器の形態の変化に留意して、土器成形の過程を記述したものがほとんどであった。考古学的な研究では、土器の形からそのつくり方を推論することはできても、そのつくり方の多様性を記述することは方法論的に困難であった。成形技術の多様性を記述することに、積極的な意義が見いだされていなかったともいえる。このように、土器づくりはあくまで技術的な実践としてとどめおかれた一方で、完成された土器は象徴的な人工物として位置づけられたり、社会的な意味を付与されるなどして、土器だけが文化・社会的な実践の分析対象としてとらえられてきた。これは、「(完成された)もの」を「人(の行為)」ときりはなして理解するという見方に強く影響を受けているといえる。

もちろん、この数十年のあいだに、考古学的な研究においても、文化人類学的な研究においても、ものと人を同じ行為体としてとらえ、ものが人に

働きかけることをふくめて、ものと人のむすびつきかたを検討しようとする見方や、ものスタイルのなかに人間の行為を見いだそうとする議論がなされてきた。しかし、土器をつくる身体を、職人同士さらには職人と調査者のコミュニケーションのツールとして記述し、さらには土器づくりにおける身体動作の配列を社会的な実践としてとらえなおした研究はほとんどみられなかった。

この論文において、土器づくりの成形技術の多様性をあきらかにする過程で見いだされたのは、少なくとも次の点である。ひとつめは、職人たちが20種類の特定の手指の動かし方を繰り返しかえしおこなうことによって土器を成形していたこと、ふたつめは、さまざまな村から嫁として移住してきた女性職人たちが、同じ粘土をつかっているにもかかわらずつくり方の手順にちがいがみいだされること、さらにそのようなちがいは、親族やクランなどとのむすびつきとはほとんど関係ないこと、そして最後に、彼女たちの土器づくりは、個々の職人が素材等の自然環境ととりむすぶ関係や土器を介した社会的な関係のなかでそれぞれ発展させている方法であることが示唆された。これらをふまえたうえで、この論文では、土器づくりを、素材に対してある特定の方法ではたらきかける技術的な実践としてとらえるよりも、その土器をつくる職人がもっている社会的な関係や状況に影響をうけて確立される社会的な行為としてとらえる立場にたつことを主張した。それは、自然環境による物理的な条件と社会的な拘束が交差することの両方をふまえて人びとの実践をとらえることを可能にするという点で意義があると考えたためである。

今後にむけて

今回この論文では、土器づくりにおける一連の身体技法の一部を、女性職人による身体動作の分節化の仕方にあわせて記述可能なかたちで提示するにとどまっている。今後は、すくなくとも次のふたつの方向を考えている。ひとつめは、土器づくりにおいて見いだされた共通性と多様性を、社会的な行為としてとらえる際にそれをどのように描きだすことができるのか、という問題である。エチオピアの工芸品やそのものづくりは、アフリカのほかの地域と同じように語ることができる部分(性分業



土器の口縁部を整えている様子。この手指の動かし方を分析の対象とした

があることや、社会的に周縁化されている傾向があること)があるが、それと同時にエチオピア独自に展開している課題も多い。たとえば、工業製品と在来の製品が併用されていることや、在来の技術に外来の技術や素材をくわえてあらたなものを創り出すことなどが指摘できる。多くのアフリカ地域において在来のものが急激に外来のものとおきかわっていくなかで、技術的な多様性をさまざまな差異へと転化させる要素とその関係性を検討することや、技術的な共通性を、身体を基盤としてむすびつけられるコミュニティの実践としてとらえる視点は、エチオピア在来の日用品や技法の発展を考えていくうえでも示唆をあたえてくれるものと考えている。

ふたつめは、身体という対象が、いかにして彼らの社会的文化的な実践のなかに埋め込まれていくのかを検討する視点が必要であると考えている。身体技法という概念を問題提起したモースは、身体技法の継承には威光模倣(学習者が指導者のおこなっていることを「よきもの」として認識することによって促される模倣)という概念を指摘しているが、職人たちは、母親はじめ周囲の職人たちの土器づくりを観察する一方で、模倣をしても土器をうまく成形できない、ということを主張していた。少女たちの土器づくりの習得過程を検討すると、彼女たちは、模倣してつくり方を確立していくというよりも、素材などにはたらきかけながら試行錯誤を重ねて自らの身体(手)にあわせたつくり方を確立していくように見受けられた。今後は、土器づくりなど日用品をつくりだす技法の継承過程にとどまらず、アリの人びとが担うさまざまな技法(生業活動における技術など)を検討していき、身体技法の継承について多面的に検討をすすめていきたいと考えている。

今後も、この論文でみいだした課題をもとに、身体を分析の切り口としながら、人・もの・環境という関わりのなかでつむぎだされるエチオピアの人びとの生のありようとその地域に暮らす人びとにとっての「よりよき生」について考察をふかめていきたい。

(かねこ・もりえ/京都大学)